

カルロス・クライバーのホームページ — アレクサンダー・ヴェルナー編集

カルロス・クライバー — 指揮台の上の伝説

まれに見る悲劇と偉業

音楽の世界は彼に捧げられ、彼を天才と称えた。しかしカルロス・クライバーという人は、あらゆる謎を投げかけた。世界中の大きなホール、オーケストラ、聴衆は、カリスマ的で気難しいと評されるこの花形指揮者を奪い合った。輝かしい経歴を残し、その名声によって、彼はすでに生前に伝説となったが、それは彼にとってさほど重要ではなかった。

しかし変わり者とされる彼の背後には、音楽に対するきわめて誠実かつ献身的な努力が隠されていた。音楽に対してのみ、この天性の指揮者は使命感を抱いていた。さらに作曲家やその楽譜に対しても使命感を抱いていた。完成を目指し、また心に浮かぶ理想の音響を目指して、とりつかれたように努力する彼にとって、こうした作曲家や楽譜は神聖なものであった。

カルロス・クライバーは、偉大なる父エーリッヒ・クライバーの跡を徹底して歩んだ。父エーリッヒは、彼にとってお手本にもなり基準にもなった。通常の決まりきった仕事に対しては、彼はしばしば絶望したかのように一貫して抵抗した。オペラ劇場やオーケストラが、彼の要求する仕事の条件に、仮にも近いものを与えた場合にのみ指揮をした。音楽を究めようと努力しながら、彼は情熱を燃え立たせた。またとないチャンスで新たな音響の世界を創造し、回数は少なくとも、常に時代を超越して通用する演奏を作り出した。しかし、これほど熱く口説かれ尊敬されながら、この花形指揮者はますます姿を現さなくなり、公衆をはばかり、狭いレパートリーの曲だけ指揮をした。

彼がすでに若い頃から、レコーディングのスタジオに失望して背を向けたということは、2004年に彼が74歳で亡くなったあと、偉業と悲劇とが触れ合う不思議な経歴にあって、最も手痛い特徴の一つであり続けている。しかし、カルロス・クライバーのような芸術家が忘れ去られることは、まずないであろう。彼の鳴り響く観念的な遺産が今後残り、次世代の指揮者たちをも鼓舞してくれるであろうことを、期待してよい。

アレクサンダー・ヴェルナー